

「まちづくり」の展開と その可能性

—東京都足立区を事例として—

山見かおり

「まちづくり」とは何かを説明することは難しい。それは、まちづくりが単に地域の環境整備にとどまらず、多方面で用いられているからである。しかし、都市計画と比較すると、よりソフトな面を追求していること、地域住民がその主役である、という特徴が浮かび上がってくる。地域での活動のため、地域に密着した組織である自治会などの既成住民組織がその担い手としてまず考えられるが、最近ではまちづくりに関心のある人が集まったボランティアな集団によるまちづくりも行われている。

まちづくりは、住民だけで行うことはできず、行政の力が必要である。その両者の関係は時代とともに変遷していく。近代はタテの関係の時代であった。これは封建社会の流れを汲むものである。しかし、高度経済成長に伴う環境悪化が深刻になると、従来の陳情ルートだけではそれらを解決することができなくなった。そこで住民が自ら立ち上がり、住民運動を起こし、対立の時代を迎えた。行政は従来の政策の見直しを迫られ、より住民参加を視点にいったコミュニティ行政へと変化した。一方の住民側は地域において主体性を持つようになり、行政に対して協力するようになる。こうして現在の歩み寄りの時代となり、住民が主体で行政がその補助的役割を担うという新たな地域活動として、まちづくりが登場することになる。

足立区は宿場町千住と、その他の地域に分類されるが、概して保守的な地域である。それは、東京の主要工業地域であったため、都市公害が深刻であったにもかかわらず、住民運動が発生しなかったことからわかる。そのなかで、足立区は積極的にまちづくり政策を展開する。特に、住民主体のまちづくりを資金面から援助する「あだちまちづくりトラ

スト」制度を、全国の自治体として初めて制度化したことは注目される。

この制度を利用したまちづくり団体である「千住・町・元気・探検隊」を調査した。探検隊はまちづくりに興味のある人々によって構成されたボランティアな集団で、地域外の人々も参加している。探検隊は町雑誌『千住』の制作活動をしており、その目的は、千住のよさを見直すことである。新住民の立場からその地域のよさを地付きの人々に知ってもらおうという視点が、今までにないもので興味深い。

現在のところ、足立区はまちづくり活動の主体として既成住民組織に重点を置き、住民にまちづくりを呼びかけている段階である。また、千住で探検隊の活動はまだごく一部のものにすぎない。よって、探検隊の活動が行政や地付きの人々に高く評価はされていない。しかし、探検隊は住民主体のまちづくり活動として注目すべき存在であり、これからの活動によっては、足立区のまちづくりの先駆的存在となり得るだろう。

GISを用いた東京 23 区内の 避難場所に関する分析

吉岡由希子

1995年に発生した兵庫県南部地震は多くの都市施設を破壊し、生活環境に大きな影響を及ぼしてさまざまな社会的課題を惹起した。本研究ではその中の避難場所問題に焦点を絞った。

本研究の目的は、現在都で指定されている避難場所、避難地区割り当ては適切であるかどうかを分析することであり、GISを用いて行った。近いうちに必ず大地震が起きるといわれている東京都、特に被害が大きいと予想される23区を対象とした。

まず、都の指定した避難場所、避難地区割り当て、避難道路をGISの地図上に入力し、さらに直線距離だけを考慮した仮想避難区域を作成した。また別に、老人、子供を考慮し

た避難可能区域、避難困難区域を作成した。仮想避難区域内の年齢別人口を算出し、老人人口と子供人口の総人口に対する割合を求めた。また、避難困難区域に属する老人、子供人口を算出し、23区内の住民のうち、どのくらいの老人、子供が避難困難であるかを求めた。

都の指定しているケースを見ると、避難場所の大きさの割に避難地区割り当てが広い所や、離れた避難場所を指定している所があったが、直線距離を考慮したケースでは、避難場所はある程度の区民は無事に避難できるように配置されていた。

人口を考慮した分析の結果、仮想避難区域人口が、避難計画人口を上回る避難場所は、全体の9割にも及んだ。

さらに、老人、子供を考慮して分析を行った結果、江戸川区、目黒区等で、避難困難となる老人、子供が多く、特に目黒区では約4割が、避難困難となることが分かった。

23区全体では、約150万人の老人、子供のうち、およそ14%の約21万人が避難困難となる。

秦野盆地の地形

吉田綾子

秦野盆地は、神奈川県西部の丹沢山地の南に位置する。東・北・西の三方を第三紀中新世の丹沢層群のつくる山々に囲まれ、その南限を渋沢断層によって区切られた構造盆地である。

本地域及びその周辺は、中期更新世以降の地層を切る活断層群が発達する地域であると注目されている。このようなこともあり、秦野盆地では地形学、テフクロロジー、地質学など様々な研究が繰り広げられている。しかし、秦野盆地全域の地形についての報告はされていない。そこで、これまで異なる方法で行われてきた先行研究をふまえ、空中写真判読、野外調査、地下掘削、物理探査など

の資料に基づき、秦野盆地全域の地形についての記載をすることを研究の目的とする。

今回は、秦野盆地の地形を記載するために、段丘面の形態、分布、その変形を中心に調査を進めてきた。本調査によって明らかになったものは、次のとおりである。

本地域に分布する段丘面は、上位から葛葉台面(7万年段丘)、岩倉面(5万年段丘)、T P f 1堆積面、オヶ戸面(4万年段丘)、今泉面(2～3万年段丘)、尾尻面(1～1.5万年段丘)の6面であった。

以上のように区分された地形面は、主として秦野断層・渋沢断層の2本の断層の活動によって、複雑に変形していると考えられる。

秦野断層の影響をもっとも受けた地域としては、盆地北東部の葛葉川と金目川に囲まれた地域が挙げられる。この地域では、秦野断層の断層露頭も見られ、地形面が広範囲にわたり逆傾斜している。加えて、地形面を深く切る穿入蛇行が発達している。この地形面の変形は、さらに約1km南西まで追跡できる。また、以上の変形の北西部で、盆地の中央部にあたる地域では、撓曲構造が確認できた。

渋沢断層の影響を受けたと考えられる地域で、写真判読で変形が認められるのは、断層のごく近くに限られた。渋沢断層は、東西に走る断層崖を形成している。この断層は、何本かの雁行する断層を持っており、周辺に分布するT P f 1堆積面は、複雑に変位している。また、地すべりと思われる地域もみられた。

その他には、盆地北西部で撓曲構造が見られる。筆者は、この撓曲構造の周辺で断層露頭を発見した。この断層露頭は、撓曲構造の周辺に現れた副次的な断層と考えられる。しかし詳しいことは、今後の調査の結果を待たなければならない。

調査を通して、秦野盆地を形成する基盤岩はどのように分布しているか、が最大の疑問であった。調査中、河成段丘の発達している地域には、基盤岩が見られなかったからである。この疑問が解決するとき、秦野・渋沢両